

人文学・社会科学特別委員会ヒアリング

資料3 - 2

科学技術・学術審議会 学術分科会
人文学・社会科学特別委員会（第6回）
令和3年6月21日

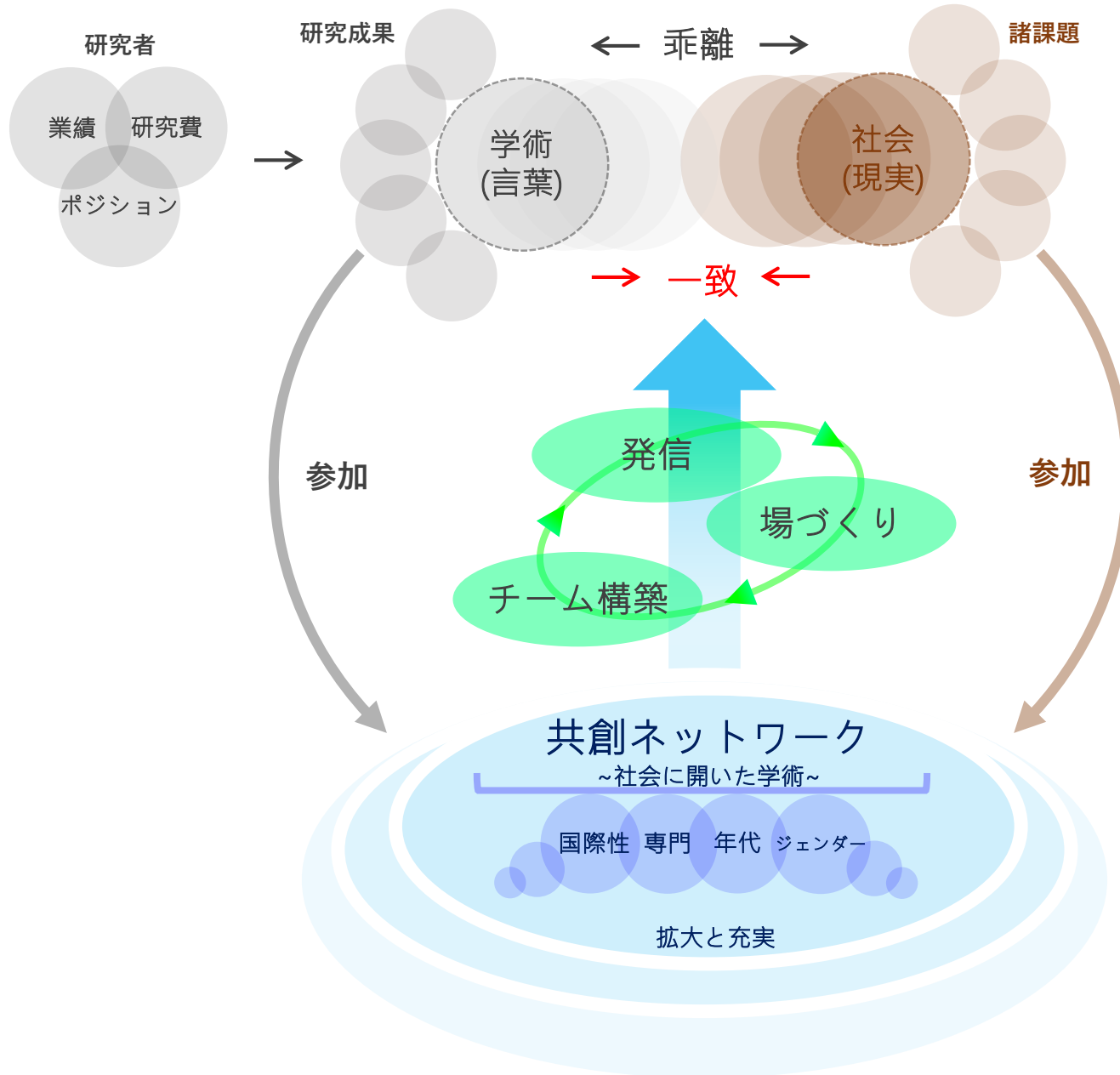
人文学・社会科学を軸とした 学術知共創プロジェクトの取り組みについて

2021年6月21日 10:00AM~

大阪大学社会ソリューションイニシアティブ
堂目卓生



問題意識：学術と社会 ~乖離から一致へ~

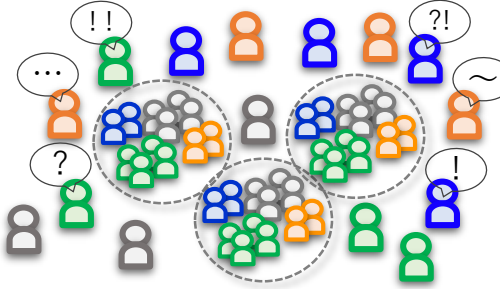


プロジェクトの進め方

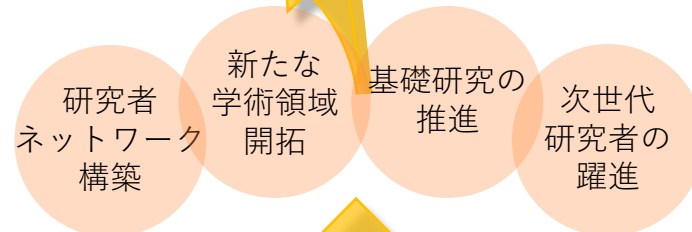
2050年「いのちを大切にできる社会」の実現

発信

第3ステップ：シンポジウム開催



多様な人々との
未来構想/プロセス検証



研究者
ネットワーク
構築

新たな
学術領域
開拓

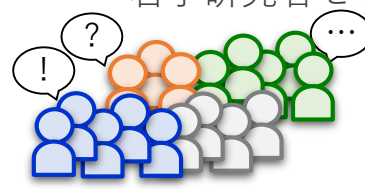
基礎研究の
推進

次世代
研究者の
躍進

3ステップの螺旋的循環プロセスの定着・発展による
「共創ネットワーク」の構築

人文学・社会科学を
軸に問い直す共通概念
「いのち」

第1ステップ：ワークショップ・
若手研究者セミナー




- 人社系研究者
- 自然科学系研究者
- ステークホルダー
- 民間/官公庁等

-3つの大きなテーマのもとでの社会課題
-分野/世代/セクターを越えた多様な参加者
(特に若手研究者)

チーム
構築

第2ステップ：研究チーム構築



研究チーム
づくり

チーム間交流

研究計画立案、メンバー補強、
若手育成、本格実施のための予備的活動

場づくり

令和2年度の活動実績(概要)

第1回WS(1/24)

第3回WS(2/9)

場づくり

第2回WS(1/25)

AIと倫理

WORK-LIFE BALANCE

分断社会の超
— 共感・共創・共生 —

✓ワークショップを大きなテーマごとに各1回開催

チーム構築

- ✓WS後にチームリーダーを募集し、研究チームの構築へ
- ✓JSPS公募に向けた準備*(チーム構築_3件)
 - 人口動態：1チーム
 - 分断社会：1チーム
 - 価値創造：1チーム

*学術知共創プロジェクトWSを経てチームアップ
→企画室が体制構築を支援(研究者ブリッジなど)
→応募に向けて準備中(on going)
*若手・女性研究者、国際連携、実務家等の要素も

発信

ホームページ開設

シンポジウム開催(3/16)

対談記事

対談インタビュー企画

- ✓シンポジウム開催(3/16)
→記事をホームページに掲載済
- ✓ホームページ開設(3/31~)
→記事やお知らせを積極的に発信していく
- ✓対談インタビュー企画(5/28~)
→記事をホームページに掲載
→今後記事を充実させていく予定

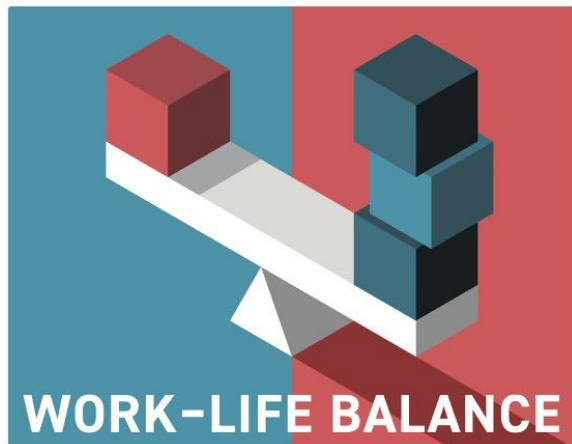
ワークショップ：参加者

文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」

第3回 学術知共創プロジェクトワークショップ

～将来の人口動態を見据えた社会・人間の在り方～

テーマ代表者：大竹文雄 大阪大学大学院経済学研究科教授



▶☒参加者：31名

#1：年代比率

20代：0.0%(0/31)

30代：41.9%(13/31)

40代：41.9%(13/31)

50代：12.9%(4/31)

60代以上：3.2%(1/31)

#2：属性

大学：71.0%(22/31)

行政：12.9%(4/31)

民間：16.1%(5/31)

文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」

第1回 学術知共創プロジェクトワークショップ

～分断社会の超克～ テーマ代表者：稲場圭信 大阪大学大学院人間科学研究科教授



▶☒参加者：41名

年代比率

20代：7.3%(3/41)

30代：22.0%(9/41)

40代：43.9%(18/41)

50代：24.4%(10/41)

60代以上：2.4%(1/41)

#2：属性

大学：95.2%(39/41)

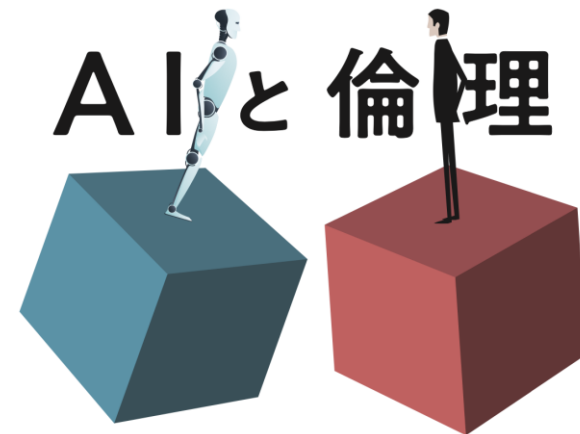
NGO/NPO：2.4%(1/41)

民間：2.4%(1/41)

文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」

第2回 学術知共創プロジェクトワークショップ

～新たな人類社会を形成する価値の創造～ テーマ代表者：出口康夫 京都大学大学院文学研究科教授



▶☒参加者：28名

年代比率

20代：7.1%(2/28)

30代：32.1%(9/28)

40代：32.1%(9/28)

50代：21.4%(6/28)

60代以上：7.1%(2/28)

#2：属性

大学：89.2%(25/28)

民間：7.2%(2/28)

URA：3.6%(1/28)

ワークショップ：進め方

	将来の人口動態 テーマ代表者 大竹文雄 (大阪大学教授)	分断社会 テーマ代表者 稲場圭信 (大阪大学教授)	新たな価値創造 テーマ代表者 出口康夫 (京都大学教授)	Memo
テーマ	ワークライフバランス	分断社会の超克	AIと倫理	
開催日時	2/9 13:00-17:00	1/24 13:00-17:30	1/25 13:00-17:30	
挨拶	○	○	○	
フラッシュトーク	-	○	○	
テーマ代表者トーク	○*	○	○	*予算申請に言及
提案者トーク	5名	5名	3名	
グループディスカッション (GD)	5グループ 企業担当者を各グループに1~2名配置	5グループ 共感x2 共創x1 共生x2	3グループ AI倫理要綱 パラヒューマン シンギュラリティ	
ファシリテーター	-	○	○	
GD小括	○	○	○	
全体討議	○	-	-	
若手研究者セミナー	-	3グループ 共感 共創 共生	3グループ AI倫理要綱 パラヒューマン シンギュラリティ	

ワークショップ：フラッシュトーク(1分間自己紹介)

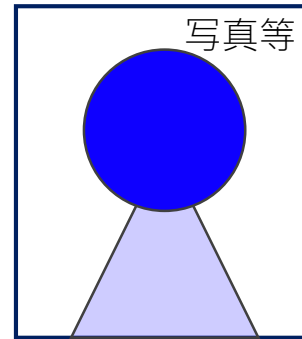
- ①自己紹介シート, ②発表者LIVE映像, ③残り時間, ④次の発表者を事務局にて合成して配信形式で進行した。

配信イメージ

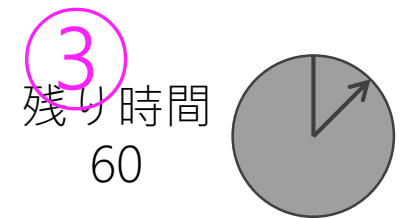
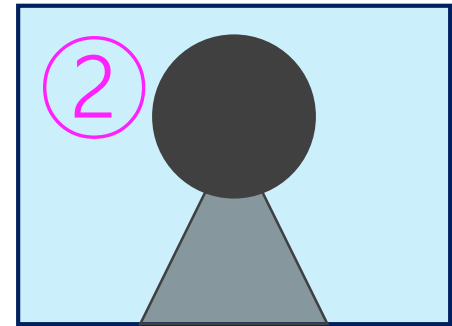
人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト
第00回 ワークショップ

氏名：00000000 (00000000)
所属：00000000

① 自己紹介シート
(参加応募時に事前提出)



自己紹介/研究紹介
(自由形式)



次の発表者は...



ワークショップ：論点(ワークライフバランス)

ダイバーシティな議論の場で働き方の未来を描く。

「第3回学術知共創プロジェクトワークショップ」開催レポート

◆期待される研究者と実務家のコラボ

「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」では、人文学・社会科学を中心とした多様な分野の研究者と、産業界や行政をはじめとするステークホルダーが、社会が直面する課題に対して共創する場づくりの一環としてワークショップを実施しています。その第3回目となる「将来の人口動態を見据えた社会・人間の在り方ワークライフバランス」を、2021年2月9日にオンラインで開催。経済学を中心に経営学、社会学など様々な角度からワークライフバランスの研究を進める研究者、実際に政策を推進している行政担当者や企業担当者など31名のメンバーがそれぞれの立場からの問題提起、活発な意見交換を行い、広がりや奥行きのある議論の場となりました。

冒頭、テーマ代表者である大阪大学大学院経済学研究科・大竹文雄教授がテーマ設定の意図を述べ、専門である行動経済学の研究成果を示しながらワークライフバランスという社会課題に対して協働することの意義や期待を語りました。続いて、2名の研究者から今回のワークショップの目的である、研究チームの構築方法と課題設定の視点について話題提供が行われました。前者については、大阪大学大学院人間科学研究科・平井啓准教授が、実務家と研究者の分野を超えた共同研究の経験からコラボレーションを成功に導くポイントを提起。後者については、慶應義塾大学経済学部・大垣昌夫教授が、ワークライフバランスを考えるうえで、幸福観や倫理観の視点を加える重要性を示唆しました。

次に、ダイハツ工業株式会社、住友電気工業株式会社、株式会社堀場製作所の3社の担当者が、ワークライフバランス推進状況や課題を報告。推進の歴史や職場環境の違いによる固有の課題がある一方で、働き方に対する価値観の世代間・ジェンダー間ギャップやそれによる分断といった共通の課題も浮き彫りになりました。

◆自由な議論から生まれる研究の芽

ワークショップは5つのグループに分かれ、各グループに研究者、企業人、行政担当者が必ず参加する形で行われました。第1グループでは、企業の協力でどのような研究ができるか、この分野での産官学研究の問題点などについて議論。第2グループでは、実効性のある政策としてトップダウンの事例訴求やメンタルヘルス防止のための先端技術などが話題にのぼりました。第3グループでは、非製造業、非大企業のモデルの必要性、個人の選択を阻害しないあり方などがテーマに。第4グループでは、ワークライフバランス推進に必要な風土と制度について議論し、風土の解析、雇用主と被用者の関係性などが論点として浮上。第5グループでは、企業が抱える課題を切り口に、ダイバーシティの評価、パフォーマンスの評価など様々な方向から研究の可能性を探りました。

グループディスカッションの後、グループごとに内容を報告。それを受けた質疑応答と全員によるフリーディスカッションを通して、論点の掘り下げや新たな視点の提供が行われたほか、さらに幅広い協働の可能性も議論され盛り上がりを見せました。ワークライフバランスへの向き合い方もそれぞれ違うメンバーの間で、今後どのように研究チームは構築されていくのが期待されます。

▶□論点例

- ・ワークライフバランスに関して、企業と研究者との間で、どのような協力が可能か
- ・メンタルヘルス等、先端研究を導入した研究の必要性
- ・ワークライフバランスを普及するための「風土」とは
- ・雇用主と被用者との関係
- ・ダイバーシティ等のパフォーマンスに関する評価指標
- ・非大企業モデルを構築する必要性
- ・世代間、ジェンダー間での意識格差
- ・「ワーク」と「ライフ」は分離してよいものか

▶□アンケート回答例

- ・研究テーマを探すというのが壮大すぎた
- ・グループディスカッションの内容やプロセスについては、ある程度構造化したほうがいい
- ・グループディスカッションではファシリテータが必要
- ・どうしても「研究チーム構築ありき」での会話になってしまった。(別の)ゴールを設定した方がアイデアが出せるのでは。
- ・どういう研究チームにすればよいのかに議論が移ってしまい、ワークライフバランスの中身について消化不良になった
- ・ディスカッションのテーマや、それぞれ考えてきてほしいことを、事前に連絡していただければ準備がよりよくできる

3月下旬には、リニューアルしたウェブサイトの詳細なレポートを掲載予定です。ぜひご覧ください。

ワークショップ：論点(分断社会の超克)

分断を超える協働の可能性が見えてきた。

「第1回学術知共創プロジェクトワークショップ」開催レポート

◆全国から41名が参加し3つの柱で議論

「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」では、人文学・社会科学に携わる研究者・ステークホルダーが共創する場づくりの一環として、ワークショップを開催しています。2021年1月24日、その幕開けとなる「分断社会の超克—共感・共創・共生」がオンラインで開催され、12の国立大学および公立私学3大学の多様な研究者に加えて、NPO 運営者や企業人41名が全国から参加しました。全員が5つのグループに分かれて議論するワークショップに加えて、40代以下の若手研究者によるセミナーも行われ、4時間半に及ぶ熱気あふれる議論の場となりました。

冒頭、テーマ代表者である大阪大学大学院人間科学研究科・稲場圭信教授がワークショップのねらいを説明。社会の様々な局面で起こる「分断」を超えるために、分断のメカニズムをとらえ直し乗り越えていく方策を探るという目標のもと、分断の心理を克服するための「共感」、科学と文化の「共創」、社会的・文化的分断を乗り越える「共生」という3つの議論の柱が示されました。その後、参加者が研究内容やワークショップへの参加動機を1分間で自己紹介するフラッシュトークが行われました。

◆分断をとらえる多様な視点

本編となるワークショップは、「共感」2グループ、「共創」1グループ、「共生」2グループで実施されました。共感の第1グループは、分断や格差の生まれる社会状況やメカニズム解明の第一歩として、共感とは何かということや、共感と分断との関わりを議論。第2グループでは、感性や趣味、アート思考から共感を導く可能性が示され、共感を行動に変える仕組みづくりなど多様な議論が展開されました。共創のグループでは、科学と文化間、社会と文化間の分断や、それらを結び付ける科学コミュニケーションの現状が話題にのびりました。共生の第1グループでは、共生を定義する数式をベースに、マイノリティや人間以外のものなど幅広い観点から共生を考察。第2グループでは、多様なステークホルダーが共創するモデルケースを示しながら、共生における自発的な関わり的重要性や人文学・社会科学の課題が議論されました。後半の若手研究者セミナーでは、引き続き3つの柱に1つずつグループをつくり、ワークショップで挙げたテーマはもちろん、研究者の協働を阻むハードルについても率直な意見の交換が行われました。共感グループでは研究分野間の共通言語の必要性などが、共創グループではアカデミアと社会の各分野とが協働の目的について対話する重要性などが議論されました。また両グループともに、学際研究の評価の仕組みが未整備であることを問題として指摘。共生グループでは、苦しむ人を対象とする研究の研究倫理の問題なども提起されました。多様な視点を持つ研究者が今後どのように協働し、イノベーションとなっていくのが期待されるキックオフになりました。

3月下旬には、リニューアルしたウェブサイトの詳細なレポートを掲載予定です。ぜひご覧ください。

2021年2月15日

▶□論点例

- ・Technology-Driven からDiversity-Driven Innovationへ
- ・分断の原因となっている「仲間」への過度な共感
- ・「自分は幸福ではない」という感覚がもたらす分断
- ・直視されるべき分断の現実
- ・共感につながるアート思考・デザイン思考
- ・分断に関する客観データの不足
- ・人間の分断傾向を前提とした社会システムの構築
- ・異なる文化・言語を翻訳、調整できる人材の重要性
- ・多様なステークホルダーが協力ができているときの規範
- ・ $A+B \rightarrow A' + B' + \alpha$ (助け合いが生み出す新たな価値)
- ・つながりを生み出すメカニズムの解明
- ・サファリング・コミュニティ(苦悩の共同体)
- ・「分断」に関して漠然と感じていることの(共通)言語化
- ・対象としてすら認識されていない存在との共生
- ・支援する側とされる側の関係性

▶□アンケート回答例

- ・フラッシュトークをグループ分けに生かすべき
- ・参加者に求められていることを最初に共有した方が良い
- ・グループディスカッションの時間がもっと欲しかった
- ・グループディスカッションの人数が多すぎる
- ・グループ・リーダーとの間に問題意識のズレがあった
- ・若手研究者セミナーの方が深い議論ができた
- ・年齢による区別は不要
- ・こうした場が必要(複数回答)

ワークショップ：論点(AIと倫理)

人間とは何かから、AIと社会のあり方を考える。

「第2回学術知共創プロジェクトワークショップ」開催レポート

◆人がAIと生きる世界を3つの方向から検討

「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」では、様々な社会課題に向き合い未来を構想するために、異分野の融合に挑戦するユニークな研究チーム発足を目標に、人文学・社会科学を中心に様々な分野の研究者・実務家が集まるワークショップを開催しています。2021年1月25日にはその第2回目として「新たな人類社会を形成する価値の創造—AIと倫理」がオンラインで開催されました。哲学・倫理学をはじめ様々な分野の研究者、AI研究や社会実装に携わる企業人、リサーチアドミニストレータなど幅広い領域から28名が集まりました。

テーマ代表者である京都大学大学院文学研究科・出口康夫教授からは、人文学・社会科学の知によってソリーションの前提となる価値の座標軸を見出し、日本・アジアを含む多様な価値観を見直し、新たな価値を創造したいというワークショップへの期待感が述べられました。参加者が研究内容やワークショップへの参加動機を1分間で自己紹介するフラッシュトークの後、出口教授の提案した「AI倫理綱領の構想」「パラヒューマン社会の未来図」「シンギュラリティ問題と実存の危機」の3テーマについてそれぞれグループディスカッションが行われました。

◆三者三様の展開に議論の広がりを感じ

「AI倫理綱領」のグループは、参加者が共同でAI倫理綱領を作る試みにトライ。載せるべき項目を選び綱領を記述してみる中で、AIの定義やAIのもたらす社会的影響などについて議論されました。「パラヒューマン社会」のグループでは、「人格」を持つような人間でないエージェントとの共存の可能性をテーマに、人格とは何かということや、パラヒューマン社会を考える上でベットの倫理が参考になるといったことにも話が及びました。「シンギュラリティ問題」のグループでは、AIの自律性を糸口に議論を進め、AIに痛みを持たせる必要があるか、法人など人以外に認められる人格をどう考えるかといった多彩な論点が生まれました。

第1回目のワークショップと同じく、後半には40代以下が参加する若手研究者セミナーが行われ、3つのグループそれぞれに個性的な議論が展開されました。「AI倫理綱領」のグループでは、せっかく作った綱領を批判的に見るという「ちゃぶ台返し」を通して、AI特有の倫理的な問題など様々な観点でAI倫理を考察。「パラヒューマン社会」のグループは自由に発想を広げ、人間に近い「弱いAI」「弱いAI」などの可能性にも言及しました。「シンギュラリティ問題」のグループでは、AIに判断や決断を任せてしまうことへの違和感をテーマに、そのような違和感はなぜ起こるのか、どう解消するのかについて議論されました。

AIについて考えることは人間を考えることである、ということが、様々な方向から改めて確認できるワークショップとなりました。AIを通して人間観がどのように見直されていくのか、今後とも興味深い議論が期待できそうです。

▶□論点例

- ・AIを定義することはできるか
- ・AIの社会的影響
- ・AI倫理綱領は必要か、誰がつくるのか、どこまで実効性を意図するのか
- ・開発したAIに対する帰結の評価、弱者保護、責任の所在、環境に及ぼす影響、悪用の禁止、自己省察の重要性、AI・AI開発者の定義、プライバシー
- ・すでに始まっているAIとの共生
- ・AIが持つ「人格」とは
- ・人と物との違いはどこにあるのか
- ・コミュニケーション能力は「理性」の存在を証明するか
- ・「私」、「人格」、「自律性」といった概念のとらえ直し
- ・道徳的配慮の根拠はどこにあるのか
- ・AIに痛みを持たせるべきか
- ・AIのデュアルユースの問題
- ・AIにインプットするデータの偏り
- ・AIに道徳的判断を任せることの是非

▶□アンケート回答例

- ・事前に各提案者のテーマを知りたかった
- ・提案者トークを聞いてからグループを選ぶ方がよい
- ・グループディスカッションでは自由に議論できたが、それではなかったのか心配
- ・グループディスカッションの目的が今一つ分からなかった
- ・あらかじめ、後でコメントを募集する旨を告げておくべき

3月下旬には、リニューアルしたウェブサイトの詳細なレポートを掲載予定です。ぜひご覧ください。

2021年2月15日

シンポジウムの開催(2021.3.16)

シンポジウム記事：<https://gakujututi.ssi.osaka-u.ac.jp/symposium/>

文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」
キックオフ・シンポジウム (第3回SSIシンポジウム)



命に向き合う 知のつながり — 未来を構想する大学

地球温暖化、天然資源の枯渇、食糧不足、新型の感染症など、人類の存続にとって深刻な課題が山積する中、学術、特に「人間とは何か」、「社会はどうあるべきか」を問う人文学・社会科学に対して、社会課題に向き合い未来を構想することが求められています。今年度、この期待に応えるために提案された文部科学省委託事業「人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト」に大阪大学が採択され、社会ソリューションイニシアティブ(SSI)が企画運営を担うことになりました。シンポジウムでは、大阪大学元総長の野田清一名誉教授に講演していただくとともに、様々な大学に関連する活動を紹介していただき、未来を切り拓く大学間ネットワークの構築につなげたいと思います。

2021.3.16 Tue. 13:00-18:00 ●参加費：無料 ●定員：500名

オンライン
開催

第1部「人文学・社会科学の可能性」

- 13:00 開会の辞
西尾章治郎 大阪大学総長
- 13:10 来賓挨拶
杉野 剛 文部科学省研究振興局長
- 13:20 プロジェクトの概要説明
盛山和夫 事業総括者/東京大学名誉教授
- 13:30 今年度の活動報告
堂目卓生 プロジェクト・マネージャー
- 13:45 講演「学問と社会 再論」
野田清一 大阪大学元総長/名誉教授

第2部「未来を切り拓く大学間共創ネットワークの構築に向けて」

- 15:00 事例紹介
堂目卓生 大阪大学 社会ソリューションイニシアティブ長
出口康夫 京都大学 社会未来形発信ユニット長
田口 茂 北海道大学 人間知×脳×AI研究教育センター長
大竹尚登 東京工業大学 未来社会DESIGN機構副機構長
小林信一 広島大学副学長
- 16:25 パネルディスカッション
堂目卓生、出口康夫、田口茂、小林信一、
佐藤 勲 東京工業大学 未来社会DESIGN機構長
モデレーター：井野瀬久美恵 甲南大学文学部教授
- 17:55 閉会の辞 三成賢次 大阪大学理事・副学長

参加申込は
こちらから

or

クリック

<https://forms.gle/c8TK7Uj6ANKdG9>

社会ソリューションイニシアティブ (SSI)
SOCIAL SOLUTION INITIATIVE

■主催：社会ソリューションイニシアティブ(SSI) ■お問い合わせ：ssi-office@ssi.osaka-u.ac.jp

登壇者プロフィール

基調講演



野田 清一 (わだ きよかず) 大阪大学名誉教授
テーマ：「学問と社会 再論」

1949年、京都市生まれ、京都大学大学院文学研究科博士課程修了。大阪大学教授、同総長、京都市立芸術大学理事長・学長等を歴任。元日本倫理学会会長。現在、せんだいメディアテーク館長、サントリー文化財団副理事長。専門は、臨床哲学・倫理学。主な著書に「「聴く」ことの本質」、「メルロ＝ポンティ」、「哲学の使い方」、「待つ」ということ、「つかふ 使用論ノート」など、サントリー学賞、読売文学賞、森田武夫学賞を受賞。

パネルディスカッション

「未来を切り拓く大学間共創ネットワークの構築に向けて」

◆モデレーター | 井野瀬久美恵 (いのせくみえ) 甲南大学文学部教授

京都大学大学院文学研究科(西洋史学専攻)博士課程単位取得退学。博士(文学)。専門はイギリス近現代史・大英帝国史。「植民地経験のゆくえ——アリス・ザラソンのサロンと世紀転換期の大英帝国」(人文書院、2004)で女性史・青山山女を賞賛、「字ともたちの大英帝国」(中公新書、1992)、「大英帝国という経験」(講談社、2007)、講談社学術文庫、2017)など著書多数。



●小林 信一 (こばやし しんいち)

広島大学副学長(人間社会科学担当)

テーマ：「組織と分野の垣根を超えて—広大の挑戦、私の挑戦」



筑波大博士課程単位取得退学。専門は科学技術政策、高等教育政策、科学技術論、東工大、電通大、NISTEP、筑波大、JST(科学技術研究上)の、産総研、国会図書館(科学技術に関する調査プロジェクト)などを経て2018年より広島大学高等教育研究開発センター長。本年度から人間社会科学部学部長を兼ねる。科学技術分野の文部科学大臣表彰・科学技術賞(科学技術振興部門)受賞。

●佐藤 勲 (さとう いさお)

東京工業大学未来社会DESIGN機構長/総括理事・副学長



1984年 東京工業大学大学院理工学研究科博士課程中途退学。1989年 工学博士。2000年 東京工業大学大学院教授。専門は熱工学。2008年 理事・副学長(研究担当)に就任。2012年 教育研究評議員。2011年 グローバルリーダー教育賞。2014年 副学長(国際企画担当)。2017年 副学長(戦略構想担当)。2018年から総括理事・副学長、理事・副学長(企画担当)ならびに未来社会DESIGN機構長の任にある。

●田口 茂 (たぐち しげる)

北海道大学人間知×脳×AI研究教育センター長

テーマ：「(新しい人間知)の開拓—北海道大学人間知×脳×AI研究教育センター(CHAIN)の試み」



ヴァーチャル大学(ドイツ)大学院哲学科博士課程修了。哲学博士(DrPhil)。北海道大学大学院文学研究科教授。専門は哲学、特に現象学。近年は教育学・神経科学者・ロボット工学者らと「意識」や「自己」をめぐる学際的長期研究を行っている。CHAINでは大学院生向けの文理融合的教育プログラムを展開している。主著Das Problem des 'Ur-Ich' bei Edmund Husserl (Springer, 2008)。「(現象)とは何か—教育・哲学から始まる世界観の転換」(西郷甲斐人氏の共著、筑摩書房、2019)他。

●大竹 尚登 (おおたけ なおと)

東京工業大学未来社会DESIGN機構副機構長

テーマ：「未来社会との向き合い方を考える—東京工業大学DLabの活動事例」



1986年東京工業大学工学部機械工科学卒業。1992年博士(工学)。同大学助手、助教。名古屋大学助教。准教授を経て、2009年東京工業大学准教授。2010年同大学教授。2015—18年に副学長を兼ね。2020年度から同大学未来産業技術研究所長。専任は金属材料と材料加工。同大学未来社会DESIGN機構副機構長として未来社会、未来社会の発展に取組み。

●出口 康夫 (でぐち やすお)

京都大学社会未来形発信ユニット長

テーマ：「価値の座標軸を提案する人文学・社会科学—京大人社ユニットの取り組み」



専攻は哲学。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。現在、同大学院哲学専攻教授・京都大学副学長。教養哲学に加え、新領域である分析アジア哲学を研究。近著にWhat Can't Be Said: Contradiction and Paradox in East Asian Thoughts (Oxford University Press, 2021)がある。京都大学社会未来形発信ユニット長としてオンライン講義シリーズ「立ち止まって、考える」を主導すると共に、NTTや日立製作所との産学連携も行ってきている。

●堂目 卓生 (どうめ たくお)

大阪大学社会ソリューションイニシアティブ長

テーマ：「命を大切にすることを目指して—SSIの理念と活動」



京都大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。専門分野は 経済学史、経済思想。Political Economy of Public Finance in Britain 1767-1873 (Routledge 2004)で経路-経済圏文化賞、「アダム・スミス—「道徳感情論」と「国富論」の世界」(中央公論新社、2008)で、サントリー学賞を受賞。2019年、最優秀賞。2001年より大阪大学教授。2018年より社会ソリューションイニシアティブ(SSI)長。

TOPビジュアル



文部科学省委託事業

人文学・社会科学を軸とした
学術知共創プロジェクト

説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。
説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説明文
の文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説明文が入りますこの
文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。

が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説
りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説明文が
ますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説明
入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。

説明文が入りますこの文章はダミーです。

テーマ紹介

Basic theme
プロジェクトの基本テーマ

説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説明文が入りますこの文章はダミーです。
レイアウトを確認するためのものです。説明文が入りますこの文章はダミーです。

Theme 1

将来の人口動態を見据えた
社会・人間の在り方

説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。

テーマに関する情報

Theme 2

分断社会の超克

説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。

テーマに関する情報

Theme 3

新たな人類社会を形成する
価値の創造

説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。

テーマに関する情報

各種案内

WORKSHOP —
ワークショップ

説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説明文が入りますこの文章はダミーです。

詳しくはこちら

SYMPOSIUM —
シンポジウム

説明文が入りますこの文章はダミーです。レイアウトを確認するためのものです。説明文が入りますこの文章はダミーです。

詳しくはこちら

Articles of projects

記事

プロジェクトの背景

すべて ワークショップ 研究チーム シンポジウム 活動報告 お知らせ

TALK vol.01

2021/05/28

【対談 vol.01】 社会への応答は
人文・社会科学の本来の意義—
公共社会学の観点から（盛山和
夫 × 堂目卓生）

0/00/00

記事タイトルが入りますこの文
はダミーですレイアウトを確
認するためのものです。

テーマ省略名称 #カテゴリー名
カテゴリー名 #テーマ省略
カテゴリー名

後編

2021/04/21

キックオフ・シンポジウムレポ
ート 命に向き合う知のつなが
り—未来を構想する大学【後
編】

#シンポジウム #活動報告

前編

2021/04/21

キックオフ・シンポジウムレポ
ート 命に向き合う知のつなが
り—未来を構想する大学【前
編】

#シンポジウム #活動報告

2021/03/31

第2回ワークショップレポート
新たな人類社会を形成する価値
の創造—AIと倫理

2021/03/31

第1回ワークショップレポート
分断社会の超克—共感・共創・
共生

#新たな価値創造 #ワークショップ
#活動報告

2021/03/19

キックオフ・シンポジウム（第
3回SSIシンポジウム）ご参加
のお礼

#シンポジウム #お知らせ

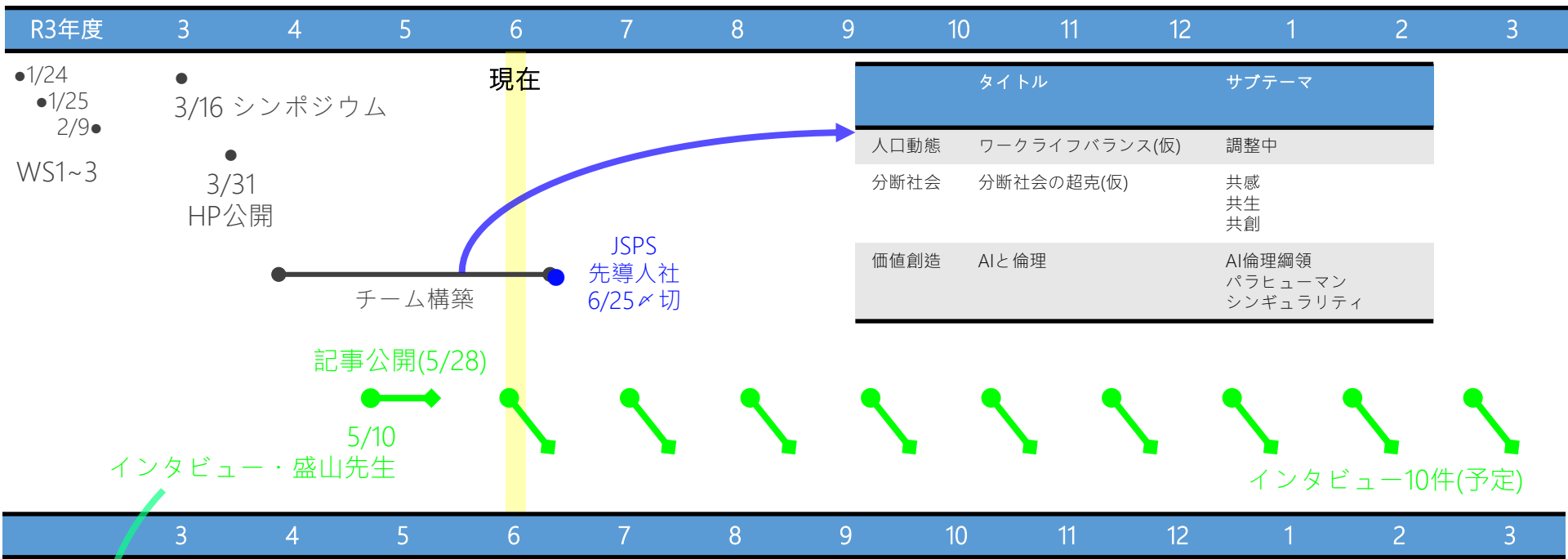
2021/02/22

第3回ワークショップレポート
将来の人口動態を見据えた社
会・人間の在り方—ワークライ
フバランス【速報版】

#将来の人口動態 #ワークショップ
#活動報告



R3年度の事業計画



タイトル	サブテーマ
人口動態	ワークライフバランス(仮) 調整中
分断社会	分断社会の超克(仮) 共感 共生 共創
価値創造	AIと倫理 AI倫理綱領 パラビューマン シンギュラリティ



◆インタビュー企画詳細

形式

- インタビュー(対談形式)
- 90分程度_Zoom/対面
- 記事化(10件程度/R3年度)
- ホームページで記事を公開

内容

- ① 解決すべき社会課題、ありたい社会という目的への問い
- ② それらに対する自身の専門分野の位置づけ・評価
- ③ ①②を踏まえた「共創の場」の必要性和可能性

・ 学術における「共創」とは何か

「出会い」によって、各自がそれまで考えていなかった、あるいは言語化していなかった「論点」が明確になり、論点が組み合わせられたり、深掘りされたりすることによって「研究シーズ」（課題解決への手掛かり）が醸成されていくこと

・ 「共創の場」を創る上で取るべきバランス

「場づくり」にウエイトを置くか、「研究チーム構築」（資金獲得を含む）にウエイトを置くか

・ 社会にどう理解してもらうか

言葉の「深み」を失うことなく分かりやすく伝える必要性。社会からのフィードバックを受け止める意識と仕組み。